

# 子供が主体的に学び取る授業へ ～クラウド環境を活かした授業デザイン～

仙台市立錦ヶ丘小学校 教諭 長谷川 菜々

## 1 はじめに

NHK for School の番組や動画クリップを活用した家庭での情報収集をもとに、授業では持ち寄った情報を端末での協働編集で整理・分析し、まとめて表現するという探究的な学習過程を意識した単元構成を工夫した。クラウド環境を活かした家庭での動画視聴による情報収集や協働編集を行うことで、情報活用能力を発揮しながら探究的な深い学びを実現することをねらいとした。

## 2 実践の概要

5年生社会科の学習において、情報収集を家庭学習で行う単元構成に改善して実践を行った(表1)。

従来の単元構成	改善した単元構成
1. 伝統を生かした工業や中小工業の技術に着目して、問いを掲出す。	1. 学習問題と個人の追究課題を設定する。 情報端末を持ち寄り、個人の追究課題について家庭学習で調べ、調べノート(ジャムボード)にまとめておく。
2. 伝統的な工業について調べる。	2. ゲームが得意な人たちがグループとなり、情報を整理・分析する。整理・分析した内容を協働編集でスライドにまとめる。必要ときには調べ直す。現時点での学び方を振り返る。
3. 大田区の工場(中小工場)について調べる。	3. プレゼンを受けて疑問に感じた内容について、チャット上で交流する。(家庭)
4. 工業生産の課題や、課題に対する取り組みについて調べる。	4. スライドを使って全体でプレゼンする。聞き手はチャットで感想や疑問を交流する。
5. これからの工業生産に大切だと思うことを話し合う。	5. これからの自動車工業について考え、議論する。

表1 改善した授業デザイン

クラウド環境が整い、多様な授業デザインが可能となったことを踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びの往還を目指した授業デザインの改善を行った。従前の単元計画では多くの時間をしめていた情報収集を家庭で行うように変更して実践を行った。



図1 児童の追究課題ノート (JamBoard)



図2 児童の情報収集ノート (JamBoard)

図2で示したノートは学習問題に迫る個人の追究課題を決めるためのノートである。気づきや疑問を整理して最終的に自分の課題を決定していった。その後、設定した個人の追究課題について3日間かけて家庭でじっくり調べ、情報収集ノートにそれぞれまとめてくるように変更した(図2)。一見すると同じ5時間扱いの単元構成に家庭での学習が挿入されただけのように見えるが、学校での授業が「調べる」ことを中心とした時間から「家庭で調べた多様な情報を協働で整理・分析して考えながら学び取る」時間へと変化した。

情報収集は、家庭で行うことを踏まえて、知識習得のための具体的な手立てを講じた。クラスルームを参照すれば調べる手順は常に参照できるようにしておき、各自の情報収集ノートはクラスルーム上で共有した。充実したクラウド環境により、家庭という異なる空間にいたながらも、クラスルームやチャットなどを利用することで学びを共有したり助言し合ったりする様子が見られるようになった。

学校の授業では、各自の考えの相違点や共通点を整理・分析しながら、学習問題に対する自分たちなりのまとめを、協働編集でつくり出していった(写真1)。



写真1 協働編集による整理・分析

「子供が主体的に学び取るための学習指導」を実現するために重要視したことは、授業デザインの改善に加えて、子供たちに自分の学び方を学習段階に応じて振り返らせ、学びをメタ認知させることだった。学び方のルーブリックを子供たちと共に作成し、単元始め、中盤、終わりの場面で、その時点での自分の達成度と共にとどのように改善していけば良いかを振り返らせた(図3)。また、友達と教師からの他者評価も行ったことで、自分では気付けなかった良さや改善点を知る機会となった。

S	複数の情報源から情報を取捨選択し、多角的な視点から整理・分析することができる。
A	複数の情報源から情報を取捨選択し、協働で整理・分析することができる。
B	複数の情報源から情報を取捨選択することはできるが、整理・分析することはできない。
C	情報を取捨選択することができない。

図3 学び方のルーブリック一例

学び方を振り返り、改善していくプロセスを繰り返したことで、子供たちは自分に適した情報収集や整理・分析の方法を学習していった。

### 3 成果と課題

改善した授業デザインでの学習を、年間を通じて実践したことで、自己調整力に関する自己効力感の向上が見られた。改善した授業デザインでの学習を実践する前の4月と実践した後の12月で自己調整力に大きく関連する「話し合うこと」「協働すること」「考えをまとめること」「学びを振り返ること」についての自己効力感についてアンケートを取った結果、大きく向上した結果が見られた(図4)。

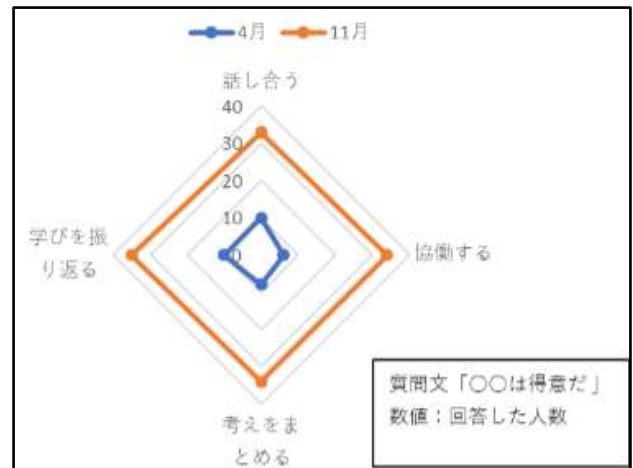


図4 自己効力感に関する4つの事柄の自己効力感の変化

さらに自己効力感が向上したことで、能動的に課題解決に向かうようになり、他者から誤りを指摘されたりまとめまでのプロセスがうまくいかなかったりしても、自分ならできると前向きな気持ちで粘り強く学習に取り組めるようになった。

また、改善した授業デザインでの学習を進めるうえで不可欠なことはメディア・リテラシーの指導であると実感している。メディアの特性の理解や情報の読解力などについての知識や思考力を身に付けられるような指導を、教科等横断的に行っていくことが今後の課題である。

### 4 おわりに

クラウド環境が整備されたことにより、以前よりも充実させることが可能となった個別最適な学びと協働的な学びの往還は、子供主体の学びを促進させていると感じている。自分の興味に合わせて学習をすすめる楽しさや、友達と学びを広げたり深めたりする喜びに気付いた子供たちは、誰に指示されなくても日常から疑問や課題を見つけ自ら探究していけるだろう。だからこそ「子供が主体的に学ぶ姿」であると考え、これからも子供の学びの伴走者であるように努力していきたい。